

# 霧島屋久国立公園錦江湾地域戦略的運営プログラム

平成22年3月

環境省九州地方環境事務所

## 目 次

1. 錦江湾地域の概要	2
2. 錦江湾地域の保護と利用の現状と課題	5
(1) 霧島屋久国立公園錦江湾地域の現在にいたる経緯	
(2) 規制計画及び施設計画	
(3) 利用の現状	
(4) 霧島屋久国立公園錦江湾地域の課題	
3. 国立公園錦江湾地域の基本理念と基本方針	11
4. 魅力的な国立公園に向けた取組の方向性	14
5. 各種取組と役割分担	15
(1) 環境省	
(2) 鹿児島県	
(3) 関係市町	
(4) 国道事務所	
(5) 公園事業者	
(6) 交通事業者	
(7) NPO, NGO	
(8) 公園利用者	
参考資料	18

## はじめに

霧島屋久国立公園錦江湾地域は、桜島、指宿、佐多岬など錦江湾をとりまく火山を主体とする地域が昭和 30 年に錦江湾国定公園として指定された後、昭和 39 年に屋久島とともに霧島屋久国立公園に追加指定されました。昭和 40～50 年代には多くの利用者が訪れましたが、その後海外旅行が一般的になったことなどから利用者は減少傾向にあります。特に大隅半島の佐多岬地区については利用者が著しく減少し、老朽化した公園事業施設の更新が困難になるなどの問題が生じています。

錦江湾地域の国立公園利用の推進にあたっては、地域の有する価値を見直すとともに、現在の利用のニーズを踏まえながら、錦江湾地域全体の国立公園の保全と利用のあり方の検討が必要です。

本プログラムは、平成 23 年 3 月の九州新幹線鹿児島ルート全線開通による利用動態の変化や、近年の歴史文化的資源への関心の高まり等の当該地域をとりまく社会経済的な背景を勘案しながら、平成 23 年度に予定されている錦江湾地域の公園計画の点検に備え、魅力ある国立公園づくりを実現することを目的とし、有識者と関係機関からなる懇談会の議論を踏まえ、国立公園錦江湾の基本理念と基本方針、具体的な取組みについてとりまとめたものです。

## 1. 錦江湾地域の概要

霧島屋久国立公園に指定されている錦江湾地域は古くより景勝地として親しまれてきました。その代表的なものが、桜島を築山に錦江湾を池にみたてた雄大な借景をもつ仙巖園で、万治元年(1658)、19代島津光久がこの地に別邸を構えたのに始まります。昭和2年には、「昭和の新時代を代表する勝景を新しい好尚によって選定する」ことを目的に実施された「日本百景」にも選定されています。

中でも桜島は多くの人々を惹きつけてきました。江戸時代の医師である橋南谿は、「名山論」の中で「景色無双なるは薩摩の桜島由也。蒼海の真中に只壺つ離れて独立し、最嶮峻なるに、日光映ずれば山の色紫に見え、絶頂より白雲を蒸すがごとく煙り常に立登る。たとえば青畳の上に香炉を置きたるがごとし。」と絶賛し、大正から昭和にかけて活躍した日本を代表する洋画家である梅原龍三郎は、桜島を題材に連作を制作しました。

磯庭園から仰ぎ見る桜島、開聞岳、佐多岬の断崖景観など錦江湾の風景は、多くの観光客のみならず、鹿児島県民に愛され親しまれている風景です。

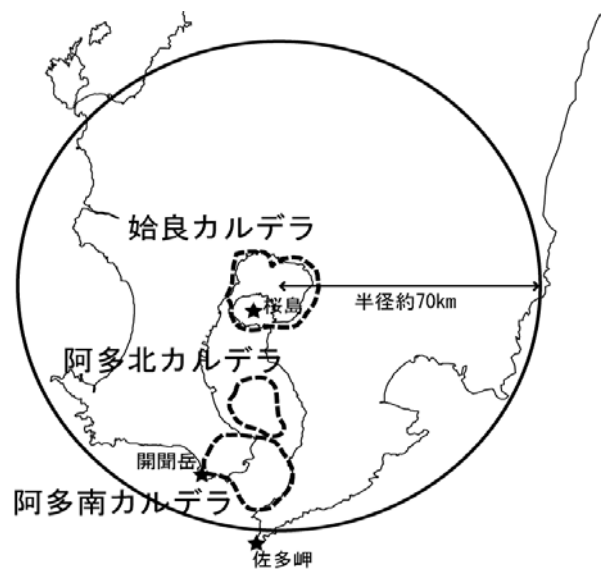
錦江湾は、鹿児島県の薩摩半島と大隅半島に挟まれた湾で、面積は1,130km<sup>2</sup>、南北約80km、東西約20kmのやや蛇行した形状をなしており、その大きさは東京湾とほぼ同じ大きさです。一方、東京湾が50mよりも浅いのに対し、錦江湾の深いところは200m以上の深さがあります。これは、錦江湾の形成に深い関わりがあります。

この地域では、約30,000年前に超巨大噴火が起きました。このときの噴煙は、標高約4万メートルに達し、吐き出された火山噴出物の量は約400km<sup>3</sup>と推定されています。この火砕流の規模は、雲仙普賢岳の約1万倍の量であり、これは仮に鹿児島県本土に広げたとすると、約60mの厚さになります。このような大量の火山噴出物により地面が陥没して始良カルデラが形成され、海水が流入することによって、深い水深を持つ錦江湾が形成されました。

火山噴出物の大部分は流体の性質を持っていましたが、噴火の規模が極めて大きかったことから、始良カルデラを中心に全体として半径約70kmの範囲に厚く堆積し平らな地面を形成しました。これが雨や河川などの浸食を受けた結果、現在のシラス台地の一部を成す地形が出来上がりました。火山噴出物で形成された台地は珍しいものではありませんが、シラス台地は比較的新しい年代に形成された新鮮な台地であり、形成時の地形、基盤となる地形、浸食の過程を観察することができ、白っぽい砂質と相まって我が国を代表するものです。

錦江湾地域では始良カルデラの他にも多くの火山地形を観察することが出来ます。

桜島は、始良カルデラの南端に形成された火山で、約25,000年前に海底で噴火が始まった北



始良・阿多北・阿多南カルデラ位置図

岳と、約 4,000 年前に噴火が始まった南岳とが、南北に連なってできた複合火山です。南北方向から見ると富士山のような形に見え、東西方向から見ると横長に見えます。北岳は古いため、侵食されて表面がゴツゴツとした形に見え、新しい南岳にはあまり侵食が見られません。このように、角度により多様な表情を見られるのが、桜島の特徴です。有史以来、数多くの噴火を繰り返しており、文明溶岩、安永溶岩、大正溶岩、昭和溶岩を流出させた噴火は大規模で、一部の集落を埋没させたほか、農地や山林に多大な火山被害をもたらしました。特に大正3年の大噴火では、流出した溶岩により桜島の南西側にあった烏島は埋没し、東側の瀬戸海峡は埋められ、それまで孤立した火山島であった桜島は、大隅半島と陸続きになりました。

錦江湾の北側の海底でも噴火活動が続いています。火山ガスが噴出し、海面では気泡を観察することができ、地元の漁師は「たぎり」と呼んでいます。

錦江湾の湾口を構成しているのは約 11 万年前の大噴火で形成された阿多南カルデラです。そのカルデラ壁は、大隅半島では根占の断崖地帯（辻岳断層崖）、薩摩半島では鬼門平断層崖で観察することができます。一方、佐多岬の断崖は、中生代から第三紀に堆積した四万十層群から成る山地が傾動して沈水したもので、海岸は黒潮の波に侵食され、海面から垂直に切り立った海食崖が形成されています。この付近は、火砕流堆積物が堆積しておらず、その対比も興味深いものです。

開聞岳は、薩摩半島の南端にそびえる標高 924m の火山で、その秀麗な姿から「さつま富士」と呼ばれ、ランドマークとして広く親しまれています。その美しさから、標高は 1500m に達しませんが、深田久弥の「日本百名山」に例外的に選ばれており、多くの登山者が訪れます。この火山は約 4000 年前から約 1000 年前までの噴火によって形成され、最新の噴火の記録は 874 年の貞観噴火、885 年の仁和噴火です。その時の地形変化は歴史文書や指宿の橋牟礼川遺跡に記録されています。

池田湖は、周囲 15km、面積 10.91km<sup>2</sup>、水深 233m で、九州で最大の湖です。このカルデラは約 5500-5700 年前に噴火しました。

始良カルデラの噴火に伴う 600°C を超える火山噴出物の通過や堆積、さらに火山灰の堆積により、南九州の植生は一旦消滅したと考えられています。このような死の世界に、どのくらいの時間の経過後に、どのような種の植生が新生または再生し、回復していったかは定かではありません。

しかし、旧石器時代の後半、地球全体が氷期だった約 2 万年前には、錦江湾周辺は、モミ属やツガ属などの針葉樹が優勢な森が広がっていたといわれています。約 1 万 3000 年前に氷期が終わると、気温の上昇に伴い針葉樹林が優勢だったところに落葉樹林が成立します。約 1 万年前になると、温暖湿潤なモンスーン気候が広く日本列島を覆い、この頃、つまり縄文時代早期前葉には錦江湾の周囲には集落が成立し人々が定住を始めたと考えられています。現在見られるような照葉樹主体の森が広がり始めたのは約 8,000 年前と考えられています。かつては広い範囲を覆っていた照葉樹林については、現在、自然環境保全地域に指定されている稲尾岳周辺で見ることが出来ます。大隅半島では、その他にも小面積ですが大木の残る非常に良い照葉樹林が残されています。

このように、氷期・間氷期のサイクルによって気候帯の境界が南北に移動したことで、海岸から標高 1200m に達する山地の存在により、錦江湾地域には亜熱帯から熱帯に分布する南方系植生と、冷温帯に分布する北方系植生とが共に分布します。例えば、メヒルギやグンバイヒルガオ、ヘゴ、ソテツ、ビロウなど南方系植物の北限となっており、高隈山は冷温帯の優占種であるブナ、

ミズナラの南限となっています。このように、南限・北限の動植物を多く見ることができるのも特徴で、錦江湾は生物多様性の豊かな地域といえるでしょう。

佐多岬の先端部は、ここを北限とするシマウリノキやホルトカズラなどの多数の南方系植物が見られ、亜熱帯の様相を呈しています。フカノキやホルトノキ、モクタチバナなどの高木層、アオノクマタケランやオオイワヒトデなどが林床で優占する海岸林が多く、海岸の断崖には国の天然記念物であるソテツの自生地があります。

この地域では温暖な気候に着眼した島津氏が、藩政時代に薬園(佐多旧薬園)を開設しており、リュウガンやレイシ、オオバゴムノキ、フトモモ、バンジロウ、アカテツ、クワズイモなどが植栽され、レイシは現在でも佐多地域の特産物となっています。

火山活動によって形成された大地を緑が覆っていく様子は桜島で観察することができます。桜島には噴火年代の異なる溶岩原に、遷移段階の異なる植生が形成されています。荒々しい溶岩にイタドリ、ススキ、クロマツ、タブノキまでが徐々に進入していく様子など、遷移の進行を観察できる学術的に大変貴重な植生であり、世界的レベルでの希少性が認められます。また、鹿児島県全体でみると、霧島の韓国岳や大浪池など遷移段階の進んだ植生もみられ、様々な遷移段階の植生が分布している点は、観光資源としても貴重なものです。

深く入り込んだ錦江湾は、古くから港として利用されてきました。

歴史上、本地域に長い関わりを持つ島津氏が南九州を統治するようになったのは、この地が海外貿易にとって重要な場所であったことに由来します。鎌倉時代、日宋貿易の重要なルートが南東航路であり、鹿児島は非常に重要な港町であったことから、鎌倉幕府は鎌倉の武士であり源氏と関係の深い島津氏にこの地を守らせることにしたのです。

大航海時代のアジア図を見ると、小さな島国の日本が描かれており、その南端に鹿児島が書かれています。また、当時の日本を書いた書物の挿絵にも鹿児島の港町が描かれています。フランスコ＝ザビエルが日本を訪れるきっかけとなったジョルズ・アルバレスが書いた「日本報告」という書籍にも南九州や錦江湾の港町が記載されており、大航海時代のヨーロッパ人に、いかに鹿児島という港町が認識され、また南九州や錦江湾に枢要な港町があつたかがうかがえます。

アジア初の近代洋式工場群である集成館が磯地区に建設されていますが、明治維新の大変革期において島津氏が大きな役割を果たしたのは、この南に開かれた港を通じた人や物の活発な交流が行われたことが背景にあります。

このように、錦江湾地域は南に開かれた国際的な港町としての特徴を有しているのです。

## 2. 錦江湾地域の保護と利用の現状と課題

### (1) 霧島屋久国立公園錦江湾地域の現在にいたる経緯

錦江湾地域を国の公園に指定するための動きは、昭和 10 年頃から起こったと言われています。

具体的な動きとしては、昭和 24 年(1949 年)に鹿児島県が「鹿児島県国立公園候補地学術調査」を実施しています。その報告書(1950 年)の中で、田村剛博士は錦江湾地域について「本地方の火山地形は、頗る稀有なもので、世界的にも誇りうるものとしてよいようである。」、「南国的な情調に彩られていることが観光上の特徴である」と述べています。この時すでに、特徴的な景観として、桜島を中心とする始良カルデラ、指宿周辺の火山地形・海岸線、辻岳連峰、佐多岬が挙げられています。中でも佐多岬は、「亜熱帯植生のやや原始的景観を保存する」と評価しています。一方で、錦江湾周辺は土地の開発が進んでいることが課題と指摘されています。

全国的には、昭和 9 年(1934 年)の国立公園の第一次指定以後、終戦後から国立公園の指定要望が相次いでおり、戦後の復興の動きの中で観光施策が全国的に推進され、戦時中に検討されていた候補地が国立公園に指定されました。その後、昭和 20 年代末には新たな候補地の選定が、同一の風景型式中で代表する一カ所の地区のみとする厳選主義で行われ、選に漏れた地区は昭和 24 年に制度化された国定公園として指定されました。この流れの中で、昭和 30 年(1955 年)に桜島・指宿・佐多岬を区域とする錦江湾国定公園が指定されています。

昭和 30 年代後半には、一風景型式一公園の原則が曖昧になり、景観評価においても地被や生物そのものを尊重する傾向が生まれました。この流れの中で、昭和 39 年(1964 年)に屋久島が国立公園に加わり、錦江湾国定公園についても、利用上関連性の高い地域として国立公園に編入・再構成がなされました。この際、鹿児島県からは「霧島錦江湾屋久島国立公園」の名称で提案がなされましたが、結果として「霧島屋久国立公園」となり、「錦江湾」の文字は国立公園の名称には出ずに消えてしまいました。先に国定公園が指定されていて、国立公園となった際に名称が消えてしまったケースは他にはありません。名称が消えたことが、後々の国立公園の管理や地域振興に影響を与えたという地域からの指摘も出ています。

その後、昭和 45 年(1970 年)には桜島地区及び佐多地区において海中公園地区が指定され、その後一部区域の見直しが行われていますが、基本的には国定公園指定当時の区域で現在にいたっています。

### (2) 規制計画及び施設計画

国立公園錦江湾地域は、湾中央の桜島地区と、薩摩半島先端の指宿地区、大隅半島先端の佐多地区の三つからなっています。

桜島地区は、始良カルデラの南縁に生まれた桜島を中心とし、カルデラ壁の一部である吉野、早崎の岩壁を含む一帯が国立公園に指定されています。

指宿地区は、知林ヶ島と摺ヶ浜を結ぶ海岸線や阿多カルデラの輪郭を画す複成火山の開聞岳、カルデラ湖の池田湖、火口湖の鰻池、マール式火口湖の鏡池などの主要な景観地が指定されています。知林ヶ島は、干潮時に対岸の田良岬とつながる陸けい島です。

佐多地区は、阿多カルデラの東縁に位置し花崗岩の根占の断崖地帯(辻岳断層崖)と九州本土最南端の佐多岬などの主要な景観地が国立公園に指定されています。

## ①規制計画

錦江湾地域は、桜島地区、指宿地区、佐多地区に対して、合計 15,842ha に国立公園（陸域）が指定されています。また桜島地区と佐多地区には、合計 38.3ha の海中公園地区が指定されています。

陸域においては全体の 95.2%（15,085ha）が特別地域に指定されており、中でも第 2 種特別地域の割合（66.7%（8,341ha））が高くなっています。また、特別地域の土地所有をみると、特に私有地の割合が高い（特別地域の 68.3%）のが特徴で、社会経済活動において、保護と利用の軋轢が生じやすい状況となっています。

## ②施設計画

錦江湾地域では、指宿地区に指宿集団施設地区が設定されているほか、道路（車道）、道路（歩道）、園地、宿舎、野営場、運動場、水泳場、舟遊場、駐車場、博物展示施設、博物館、係留施設、一般自動車道について施設計画が定められています。

桜島地区では、桜島フェリーを利用すれば入口にあたる袴腰及びその周辺を利用拠点として位置付け、園地、宿舎、博物展示施設などが計画され、整備されています。また、桜島や溶岩原を楽しむ展望園地や歩道が整備されています。対岸の磯では、仙巖園を桜島の展望と島津藩庭園の鑑賞の場として園地に位置づけています。

指宿地区では、地区の利用拠点として魚見岳の麓に集団施設地区が設定されており、宿舎、野営場、運動場などが整備されているほか、知林ヶ島に園路が整備されています。開聞岳には登山利用や自然探勝を目的とした園地や野営場等、長崎鼻には開聞岳等への展望、自然探勝や海辺利用のための園地や宿舎等、池田湖や鰻池には遊覧利用や自然探勝等のための駐車場等が計画されています。

佐多地区では、佐多岬に東シナ海等を望む展望や自然探勝のための園地が整備されているほか、田尻や大泊には自然探勝や海中公園利用のための宿舎、園地、係留施設等が計画されています。

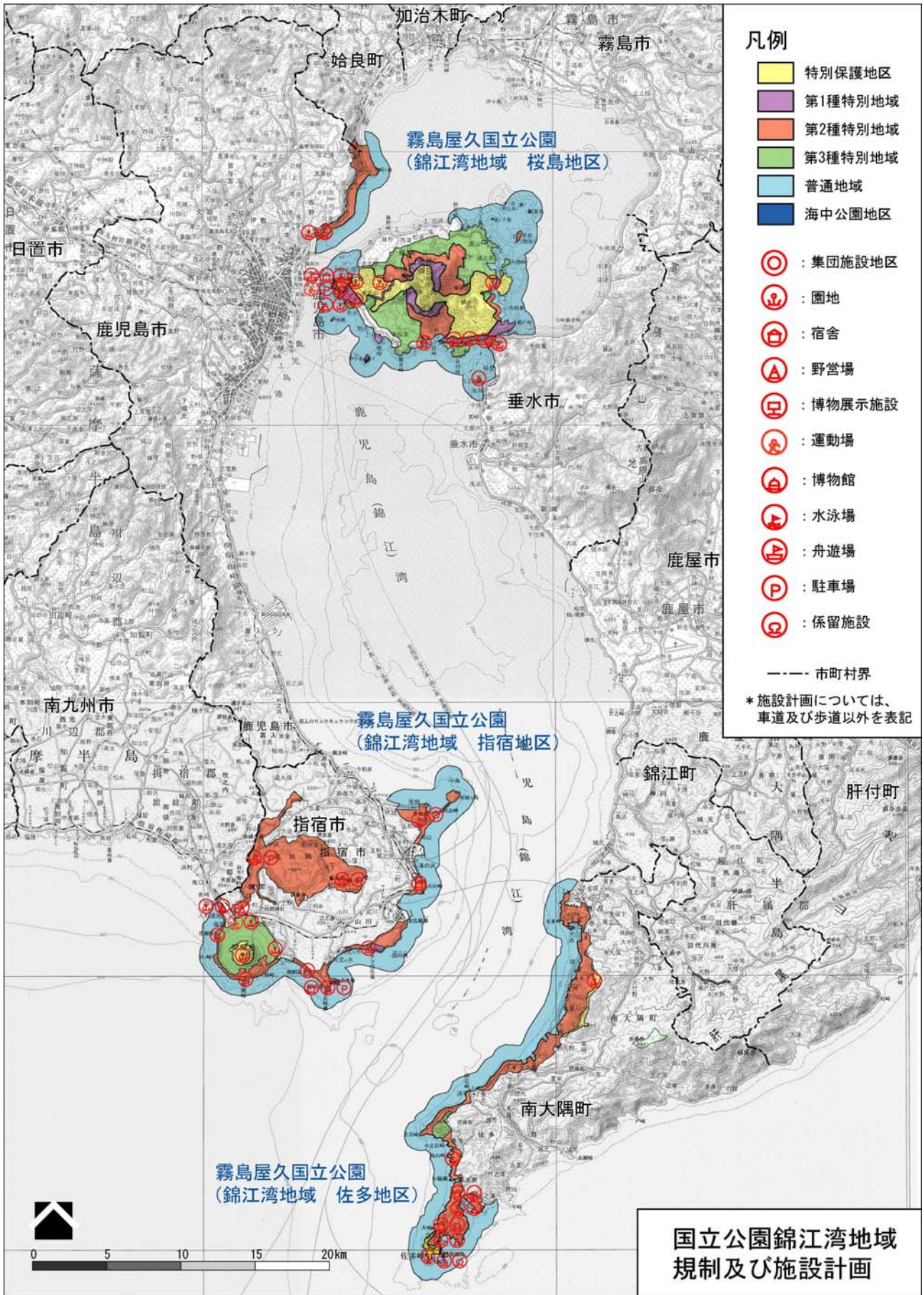
なお、69 の事業について施設計画がありますが、実際に国や地方公共団体、民間によって事業が執行されているのはこのうち 37 事業です。

## ○地域地区別土地所有別面積

地域区分	特別地域									普通地域 (陸域)			合計 (陸域)			海中公園地区			
	特別保護地区			第1種特別地域			第2種特別地域			第3種特別地域									
土地所有別	国	公	私	国	公	私	国	公	私	国	公	私	国	公	私				
土地所有別面積	815	228	1,546	55	366	380	504	2,041	5,796	374	399	2,581	2	32	723	1,750	3,066	11,026	
地種区分別面積 (比率)	2,589 (16.3)			801 (6.4)			8,341 (66.7)			3,354 (26.8)									
地域地区別面積 (比率)							12,496 (78.9)												
地域別面積 (比率)				15,085 (95.2)									757 (4.8)			15,842 (100.0)			4か所 38.3

資料：霧島屋久国立公園（錦江湾地域）指定書及び公園計画書（平成 17 年 7 月 12 日）





\*この地図は、国土地理院発行の20万分の1地形図（鹿児島、開聞岳）を使用したものである。

### (3) 利用の現状

#### ①観光客数の推移と地区別の動向

鹿児島県全域の観光客数は新婚旅行ブームの昭和 40 年代後半よりほぼ横ばいで、錦江湾地域の鹿児島・桜島地区でも横ばいですが、指宿・佐多地区は減少傾向にあります。平成 16 年(2004 年)の九州新幹線の部分開通(新八代―鹿児島)により、鹿児島・桜島地区は観光客が増加しつつありますが、指宿・佐多地区では減少傾向に変化はなく、九州新幹線の効果は限定的となっています。特に、佐多岬の観光客数は、近年大きく減少しています。

平成 23 年(2011 年)3 月の九州新幹線鹿児島ルート全線開通により、今後、関西地方や中国地方からの観光客の増加、宿泊観光客の増加が期待されますが、大隅半島は公共交通による移動が困難であり、鹿児島ルート全線開業による観光面への波及効果については当面小さいと予想されます。現在でも、観光客の訪問先としては、鹿児島地区や指宿地区が多く、大隅地区は少なくなっており、地域格差が大きくなっています。

地区別に観光旅行の目的をみると、鹿児島地区では名所・旧跡と温泉を、指宿地区は温泉を、大隅地区は自然景観を旅の主目的として訪れる観光客が多くなっています。また、温泉を有する鹿児島地区と指宿地区は、そのまま宿泊する観光客が多くなっていますが、大隅地区は少なく、立ち寄り型の利用が主となっています。

一方、本地域は国立公園等の自然公園を有する地域でありながら、いずれの地区もトレッキングなどのアウトドアレジャーを主目的とする旅行者は少なくなっています。同じ国立公園を含む種子・屋久地区では、自然景観やトレッキングなどのアウトドアレジャーを主目的とした旅行者が多く、観光客が増加しているのに比べて対照的です。

#### ②錦江湾地域の周遊ルート

かつて、新婚旅行ブームで賑わった錦江湾の周遊ルートですが、観光客は減少が続いており、特に佐多岬への訪問者は平成 4 年以降減少を続けています。

佐多岬を訪れる観光客の大部分が自家用車による利用で、県内の日帰りドライブ、九州内からのドライブ、九州外からの九州周遊ドライブ等の目的地としての吸引力を有しています。一方で、公共交通機関が不便なこともあり、航空機や新幹線の利用者の訪問は少なくなっています。

最近のアンケート結果によると、佐多岬を実際に訪れた観光客の 8 割以上は良い印象を持っており、国立公園としての佐多岬の資質が今でも人々に感動をもたらしていることを物語っています。しかしながら、老朽化した施設に関する改善要望は高くなっています。

錦江湾地域の周遊ルートをつなぐ重要な航路である山川―根占フェリーは、平成 14 年に一時廃止されたのち、平成 17 年に再開され、バスによる周遊観光が徐々に復活しつつありました。しかしながら、運航再開が十分周知されておらず、廃止前の状況に回復しない中、平成 22 年 3 月現在、採算上の理由から再び航路が途絶えた状態にあります。

関係市町へのヒアリングによると、大隅半島のみならず、薩摩半島においても山川―根占間のフェリー及び佐多岬を利用した周遊ルート形成への期待は依然として高くなっています。

## (4) 霧島屋久国立公園錦江湾地域の課題

### ① 錦江湾地域の価値の再評価とその発信

錦江湾地域は、昭和 30 年の国立公園指定以来、大規模な公園計画の見直しはなく、価値の評価は指定当時のままです。この間の自然環境に関する様々な知見の集積や、地域や観光客の関心・要請の変化も考え併せると、指定当時には十分に評価されていない価値やその利用について改めて考えていく必要があります。また、平成 21 年(2009 年)の改正により、自然公園法の目的に「生物多様性の確保への寄与」が明記され、これまでも実質的に取り組んできた自然公園における生物多様性の確保について、法律上の位置付けを明確にしたことを踏まえることも必要です。

国立公園錦江湾地域の魅力を高めて発信していくためには、錦江湾地域の価値を再発見して評価し、何を保全し、何を活用していくのかを整理し、地域で共有していくとともに、評価された価値を、わかりやすく発信し、錦江湾地域の知名度を向上していくことが課題です。

### ② 観光ニーズにあった利用形態の提案

観光ニーズは、「どこへ行くか」から「何をするか」に変化しています。また、知識欲を満たすことも求められています。

錦江湾地域では、温泉は依然として多くの観光客を呼んでいます。国立公園として多くの自然的あるいは文化的資源を有しながらトレッキングなどのアウトドアレジャーを主目的の旅行者は多くありません。

各市町や事業者においては、体験型観光、地産地消、健康志向など、近年の観光動向や社会的志向に即した取組が始まっていますが、地域の有する価値と組み合わせた知識欲も満たす魅せ方や、国立公園錦江湾地域としての連携はなく、また、十分な効果が発揮できていません。

このため、再評価された地域の価値をもとに、現在の観光ニーズに対応した利用形態を提案していくことが課題です。

### ③ 利用拠点の整備と各地区を結ぶ取組み

錦江湾地域は大きく桜島、指宿地区、佐多の三地区に分かれています。それぞれが位置的にも離れているため、相互のつながりを持って一体的な利用はなされておらず、周遊ルート形成への期待は高くなっています。

特に九州新幹線全線開通の効果を指宿、佐多地区にまで波及させるには、これまでの周遊ルートとしての資質に加え、地域独自の取組を活かしつつ、個性のある強い拠点をつくる必要があります。その上で、従来の各地の興味拠点をただ羅列的に紹介するのではなく、廻ること自体が魅力的になるようなテーマの設定が課題です。

各地区をつなぐためには、沿線の良好な景観づくりや、途中で人を引きつける見せ場も必要です。あわせて、移動手段についても、周遊バスや自動車に加え、トレッキングや自転車などの体験を伴うものや、路線バスの利用についての検討が必要です。

各地区の国立公園の施設整備は、以上の検討を踏まえて、考えていく必要があります。

#### ④環境省と地域や関係者の連携の強化

各市町や事業者は観光振興に向けた様々な取組を進めていますが、取組間の連携は少なく、さらに環境省や県の公園関係部局とも連携が不十分です。

特に、これまで錦江湾地域においては、国の直轄事業として実施する取り組みが少なかったこともあり、国と地域との関わりが希薄であったことから、今後は情報共有をはじめ、密接な関係づくりが課題です。

### 3. 国立公園錦江湾地域の基本理念と基本方針

#### (1) 基本理念

##### 個性ある強い拠点づくりにより、地域振興の核となる国立公園

霧島屋久国立公園錦江湾地域に指定されている桜島、指宿、佐多地区は、団体周遊型観光の興味地点として鹿児島県の観光を牽引してきました。しかしながら、観光ニーズが「どこへ行くか」から「何をするか」に、さらに知識欲探求型に変化したことにより、従来の団体周遊型観光は縮小し、一部地域において観光客が減少しています。

古くより景勝地として親しまれてきた錦江湾の美しさは少しもその輝きを失っておらず、磯庭園から仰ぎ見る桜島をはじめ、池田湖越しの開聞岳、佐多岬の断崖景観などの風光明媚な風景に数多く出会うことが出来ます。さらに、錦江湾地域は、現在もなお活発に続く火山活動によるダイナミックな大地の形成と、その荒地を緑に変えていく植生の形成を目の当たりみることが出来る貴重な場所であるとともに、指宿などに湧出する温泉、集成館など薩摩藩にちなむ歴史・文化的資源など興味地点に事欠かず、知識欲探求型の観光利用を含めた多様な利用を楽しむことの出来る国立公園です。

一方で、目に映る風景の形成に至る過程やエピソード、価値については十分に伝えて切れしておらず、その魅力を十分に活かしきれていないと考えます。九州新幹線鹿児島ルート全線開業に伴う集客効果を一過性のものとしないうちにも、以上の点を踏まえて観光のあり方を変える必要があります。

現在の観光ニーズに対応するためには、引き続き錦江湾地域が有する資源の適正な保護を図るとともに、桜島、指宿、佐多地区の3地区の有する価値や個性を見直し、それを活かした体験や知識欲求のメニューを提供することで、各地区で1泊程度滞在し、楽しんで頂ける「個性ある強い拠点づくり」を進めていくことが重要です。滞在時間が延びることで、地域の食に触れる機会も増え、食を通して観光業だけでなく農業や水産業の振興にも寄与し、「地域振興の核」となっていくことが期待されます。

#### (2) 基本方針

##### 地球の時間、生物の時間、人の時間

現在の我々が目にする風景は、地球、生物、人がそれぞれ積み重ねてきた時間の総体として存在します。錦江湾地域は、火山活動に関連した時間の積み重ねを容易に体感し、読み解くことが出来る場所です。例えば、桜島では、繰り返される噴火によって流れ出る溶岩が地形を作る「地球の時間」、溶岩原を緑に変える「生物の時間」、そして、重なる噴火を乗り越え、その大地にあった作物を育てながら、火山の間近で暮らしを営む「人の時間」を目の当たり



にすることができます。

「個性ある強い拠点づくり」を進めていくため、錦江湾地域において国立公園の果たすべき役割は、積み重なった時間により形成された素晴らしい風景を保全するとともに、その時間の積み重なりを想像しながら読み解く楽しみを提供し、現代の我々が生きている環境を考える機会を与えるものであると考えます。

基本理念を実現するために、「地球の時間、生物の時間、人の時間」をキーワードとして錦江湾の美しい風景を多面的に捉え、地域と連携しながら、錦江湾地域が有する資源の保全と適正な利活用を進めていきます。

## ①地形地質を軸に、時間の流れを読み解く国立公園

錦江湾地域は、火山を中心として「地球の時間、生物の時間、人の時間」を読み解くための資源に事欠きません。桜島の展望台から観察する荒々しい溶岩と植物の遷移はその代表です。また、黒神の埋没鳥居では「人の時間」に及ぼす火山の影響を目の当たりにすることが出来ます。

一方で、始良カルデラ全体を俯瞰的に展望する場所や、全国の教科書に必ず登場するシラス台地を観察し、紹介する場所は現在の国立公園内にはありません。また、風景の裏に隠されているエピソードを十分に伝え切れていません。

このため、国立公園内外に関わらず、錦江湾地域において火山を中心として「地球の時間、生物の時間、人の時間」を体感できる資源についてその価値を再評価するとともに、新たな資源の洗い出しを行い、その資源が形成されていく過程やエピソードについて調査を行います。新たに評価された資源については、公園区域への編入を検討し、保全を図るとともに、展望地点の設置など資源の利用方策について検討します。

時間の積み重ねを想像し読み解くためにはインタプリター（解説者）の存在が重要です。現在、桜島においては、桜島をまるごと博物館として捉え、体験ツアーの実施等によりその魅力を伝える動きが活発化しつつあります。これら地域の動きと連携しつつ、人材育成に努め、インタプリテーション（解説）と近年ニーズの高い体験型観光を組み合わせることにより、エコツアー・ジオツアーを推進し、国立公園の魅力の向上と発信に努めていきます。このようなソフトの充実と合わせ、時間の積み重ねについて理解を促すための施設の整備を検討します。特に、近年関心が高まっている「歩く」ことは、健康志向に応えることに加え、ゆったりとした時間の中で地域の自然や文化に触れることで、「地球の時間、生物の時間、人の時間」について理解が深まる利用形態であることからこれを推進し、歩道や標識等の整備を進めます。

錦江湾は霧島火山帯の一部に属し、霧島地域が含まれる加久藤カルデラ、始良カルデラ、阿多カルデラの形成時期の異なる三つの巨大カルデラが一行に並んでいることに特徴があります。また、霧島には桜島などよりもさらに遷移の進んだ植生を見ることができます。このため、霧島地域との連携が不可欠で、霧島地域で進められているジオパークに向けた動きと連携しながら取組を進めていくことが効果的です。

このような一連のテーマを持ち、その利活用を一体的に推進する地域として国立公園の区域等を再検討していきます。

## ②地域の暮らし、産業とつながる国立公園

人々の営みと自然の営みとの間に生まれた文化や歴史、地形地質や生物を利用し、或いは改変し営まれている産業なども「地球の時間、生物の時間、人の時間」を解説する重要な資源です。火山灰土壌で育てられる桜島大根、シラス台地の深井戸、鰻温泉のスメと呼ばれる蒸しかまどなどはその代表的なものといえるでしょう。また、佐多旧薬園や集成館などの文化財は、錦江湾地域の気候や地形等の自然条件を背景に培われてきた歴史・文化の物証です。

錦江湾地域においては、現在、グリーンツーリズムに関する取組が進みつつあります。地域の農業は「地球の時間、生物の時間、人の時間」の流れの中で続けられてきたものです。例えば、桜島小みかんは土石流で形成された水はけの良い扇状地の特産品です。地域の特産物と風景を合わせて解説することにより、「味」はまた別の意味を持ち、産業振興に寄与すると考えます。

また、指宿温泉の天然砂蒸し温泉は全国的に有名ですが、現在の健康志向に対応する形でIT 湯治といった新たな取組が進められており、豊かな自然資源を活かしたトレッキングなどと組み合わせることでさらにその魅力は高まります。

従来、環境省が行ってきた公園管理は、規制的手法が中心でしたが、地域に貢献できる魅力ある国立公園であり続けるためには、それだけでは十分には対応できなくなっています。「個性ある強い拠点づくり」は、国立公園錦江湾地域に関わる関係者が一体となって取り組むことで初めて実現します。インタープリターの養成、地域の暮らしや産業とつながった国立公園の魅力の向上、情報発信、老朽化施設への対応を含む利用拠点の景観形成など、より能動的な管理が求められていることから、国、県、関係市町、国立公園事業者、観光関係者、地域住民、NGO 等の公園の管理運営を担う関係者が円滑に協働できる体制を整えることが必要です。

## ③個性ある拠点が高めあう国立公園

桜島、指宿、佐多の3地区は、積み重なった時間が異なり、資源やその見せ方も異なります。例えば、桜島地区は生きた火山を体感し学べる場所、指宿地区は温泉を中心とした健康づくりの場所、佐多地区は南方系の植物やサンゴに彩られた体験活動の場所といったようなサブテーマを設けることも検討します。その上で、県市町の観光施策と連携しつつ、エコツアー・ジオツアーのための人材育成プログラム開発、集中的な施設整備をおこなうことにより1泊程度滞在し、楽しんでいただける「個性ある強い拠点づくり」を推進します。

また、これら三地区について、特定のテーマに沿って周辺の資源を廻る事の出来る利用ルートの設定を検討するとともに、大隅半島の錦江湾沿いを南北縦断する九州自然歩道の再整備と活用を検討していきます。

加えて、一体的な利用を促進するため、幹線道路の改良や海上交通網の確保等によるアクセス性の向上、公共交通機関及び拠点の機能充実、沿線の良好な景観づくり、途中で人を引きつける見せ場づくりが望まれます。

## 4. 魅力的な国立公園に向けた取組の方向性

### ①価値の再評価と新たな資源の洗い出し

- ・ 錦江湾地域において火山を中心として「地球の時間、生物の時間、人の時間」を体感できる資源についてその価値を改めて評価するとともに、新たな資源の洗い出しを行った上で、その資源が形成されていく過程やエピソードについての調査を実施します。

### ②公園区域及び利用計画の見直し

- ・ ①で新たに評価された資源については、公園区域への編入を検討するとともに、資源の利用方策について検討し、公園計画を見直します。
- ・ 例えば、始良カルデラ全体やシラス台地など火山活動に関わる地形・地質、特徴的な植生、海域など、錦江湾の価値を補強するものとして新たに評価された資源については、公園区域に編入することを検討します。
- ・ 巨大カルデラを俯瞰的に展望できる展望地点などを利用計画に追加し、整備等を行い、利用促進を図ります。

### ③エコツアー・ジオツアーの推進

- ・ インタープリターの人材育成を行い、近年ニーズの高い体験型観光とインタープリテーションを組み合わせることでエコツアー・ジオツアーを推進します。
- ・ グリーンツーリズムとの連携を進め、地域の特産物と風景を合わせて解説することにより、産業振興に貢献できる方策を検討します。

### ④時間の積み重ねを想像し読み解くための施設整備

- ・ 火山地形や火山活動、特徴的な植生が見られる場所、風光明媚な展望地などの利用拠点を抽出するとともに、その資源が形成されていく過程やエピソードの紹介など特徴を活かした見せ方と管理のあり方を検討し、その場にふさわしい施設を整備します。
- ・ 「地球の時間、生物の時間、人の時間」について理解を深める利用形態である「歩く」こと推進し、歩道や標識等を整備します。

### ⑤九州自然歩道の再整備と活用

- ・ 「三大カルデラの爆発的噴火と噴火の影響を受けた地形と植生」を主なテーマとし、ルート周辺の資源の精査等、佐多岬から高千穂峰にいたる九州自然歩道の現況調査を行い、再整備計画を策定するとともに維持管理体制を構築します。
- ・ 周辺の観光資源、公衆トイレや宿泊施設などを記載したルートマップを作成するとともに、ホームページを作成し、利用を促進します。
- ・ 周辺の県立自然公園とも連携し、一体的な利用を促進します。

### ⑥地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議の設置

- ・ 本プログラムを推進するための、国、県、関係市町、国立公園事業者、観光関係者による連絡会議を設置します。

### ⑦国立公園に関する情報発信

- ・ 2010年11月に霧島市と鹿児島市で開催される「自然公園ふれあい全国大会」を契機に、地域の人が地域の自然や文化の魅力を再認識する機会を設けるとともに、再認識された魅力を全国に発信します。
- ・ ⑥の連絡会議を通じ、連携したパンフレットの作成、ホームページの作成、連携した観光キャンペーンの展開などを検討します。



## 5. 各種取組と役割分担

魅力的な国立公園づくりに向け、環境省が実施する取組と、関係者に期待される取組は以下のとおりです。

### (1) 環境省

- ・国立公園に指定された風景地の保護と、国立公園の魅力を引き出す適正な利用の推進、適切な維持管理体制の構築
- ・国立公園錦江湾地域の価値を再評価するとともに、火山を中心として「地球の時間、生物の時間、人の時間」を体感できる新たな資源について洗い出しを行い、公園区域及び利用計画の見直しを実施
- ・錦江湾にはサンゴ群集や砂泥干潟が見られるが、十分な保護と利用がなされているとは言えず、また、錦江湾を形成した噴火に起因する深い内湾地形の特徴等について十分には把握できていない。このため、改正自然公園法に規定された海域公園の指定を視野に入れつつ、海域の保護と利用のあり方を検討
- ・巨大カルデラを俯瞰的に展望する展望地、特徴的な火山地形や火山活動、特徴的な植生が見られる場所、風光明媚な展望地などの利用地点を抽出するとともに、桜島、指宿、佐多の各地区で1泊して楽しめるよう、各地点の特徴を活かした見せ方を検討し、利用施設を整備
- ・特に「歩く」利用を推進する観点からの、歩道や標識等の整備
- ・上記を踏まえて、ジオパークを目指している霧島地域との連携強化と、霧島屋久国立公園の枠組みの再検討
- ・「三大カルデラと噴火の影響を受けた地形と植生」をテーマに、佐多岬から霧島にいたる九州自然歩道を再整備（特に標識や案内板のデザイン等に十分に配慮）と利用促進
- ・九州自然歩道の南大隅地区について、モデル的にルートマップを作成し、利用を促進
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議の開催

### (2) 鹿児島県

- ・「自然公園ふれあい全国大会」の開催と、これを契機とした地域の自然や文化の魅力の再認識とその発信
- ・桜島、指宿、佐多の各地区で1泊して楽しめるようその特徴を活かした見せ方を、九州地方環境事務所とともに検討
- ・桜島ビジターセンターを拠点としたジオツアーの実施促進
- ・桜島や錦江湾岸の優れた景観を楽しみながら歩く湾岸一周の「錦江湾しおかぜ街道」の整備
- ・環境省との連携による九州自然歩道の再整備と利用促進、適切な維持管理体制の構築
- ・大隅地域の「観光」「食」等の振興を推進するための会議（大隅地域振興創造会議、大隅地域若手経済人異業種交流会「大地の会」）の開催
- ・ドライブ&ウォーキングによる大隅南部の豊かな自然景観を活かした「体験・体感型」コース（大隅半島南回りルートなど）を軸にしたハード・ソフト事業の展開
- ・農山漁村のネットワークの設立（農山漁村ツーリズム連絡会議）や、研修会や交流会の実施など、グリーンツーリズムの取組の支援・錦江湾地域の資源を活かした体験型観光メニューを集約した地域密着・期間限定のイベント、「かごしまよかここ博覧会」の開催

- ・関係者と連携したパンフレットの作成や観光キャンペーンの展開
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画

### (3) 関係市町

- ・「自然公園ふれあい全国大会」の開催への協力と、これを契機とした地域の自然や文化の魅力を再認識するイベントの開催
- ・桜島観光振興プランの推進など、環境省や鹿児島県と連携した桜島、指宿、佐多の各地区における地域ぐるみの観光プログラムの開発と施設の整備
- ・特に体験型観光、地産地消の取り組み（トレッキングコースの設定、グリーンツーリズムの推進、カンパチやブリなどの地域ブランドづくり、体験型修学旅行の誘致、食のマップの作成など）の推進
- ・環境省や鹿児島県が整備する公園利用施設の維持管理への協力、利用拠点の美化清掃
- ・九州自然歩道の利用促進と適切な維持管理体制の構築
- ・関係者と連携したパンフレットの作成や観光キャンペーンの展開
- ・景観に配慮した公共空間等の整備など、錦江湾岸の景観整備
- ・地域における国立公園に対する理解の促進に向けた普及啓発、環境教育の実施
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画
- ・道の駅などにおける国立公園錦江湾地域の紹介・観光案内

### (4) 関係する国の行政機関

- ・桜島、指宿、佐多岬を結ぶルート of 修景整備や景観保全（シーニックバイウェイの活用など）
- ・桜島国際火山砂防センターと国立公園関連施設との連携
- ・各種事業実施に際しての景観への配慮
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画

### (5) 公園事業者

- ・関係行政機関の施策と連携し、桜島、指宿、佐多の各地区で1泊過ごして頂くためのプログラムの開発と地域ぐるみのPR
- ・地場産品を活用した食事の開発・提供と、その食に関するインタープリテーションの実施など地産地消の推進
- ・IT湯治など温泉の恵みを活かした、健康志向に対応するプログラムの開発、提供
- ・宿泊施設における、展望地など公園利用施設や九州自然歩道の紹介、エコツアーやジオツアーの紹介
- ・関係者と連携したパンフレットの作成や観光キャンペーンの展開
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画

### (6) 交通事業者

- ・九州新幹線鹿児島ルート全線開業を契機とした、関西圏及び福岡からの誘客キャンペーンの実施
- ・ウォーキングツアーなど、エコツアーやジオツアーを組み込んだ観光商品の開発、販売
- ・列車、バス、船舶など交通機関内での国立公園錦江湾地域の解説とPR
- ・観光客の増加に伴い拠点駅（鹿児島中央駅）として、幅広い機能を有した総合案内所の展開

- ・拠点となる駅のバリアフリー化
- ・車両などの交通施設の改良・改善（古くなった車両の一新など）
- ・拠点地区を連結する特急列車や臨時列車等の運行によるアクセス性の向上
- ・花火大会等と組み合わせた錦江湾のバイクルーズなど海上観光メニューの開発、提供
- ・JR、バス、レンタカー、観光施設、飲食店等が連携した滞在プログラム開発
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画

#### **(7) NPO、NGO**

- ・自然環境調査の実施と保全策の提言
- ・環境保全活動、美化清掃活動への参加
- ・地域の有する価値や魅力の把握と発信
- ・国立公園や九州自然歩道におけるインタープリテーションの実施
- ・国立公園や九州自然歩道の維持管理等への参画
- ・ブログやメルマガを活用した地域からの情報発信
- ・地域と連携した魅力ある国立公園づくりのための連絡会議への参画

#### **(8) 公園利用者**

- ・公園利用におけるマナーの向上
- ・施設等の維持管理コストの分担（受益者負担）
- ・国立公園や九州自然歩道の維持管理等への参画

## 参考資料

### 1. 霧島屋久国立公園錦江湾地域戦略的運営プログラム検討懇談会 参考意見集

本プログラムの作成にあたり、平成 20 年度から平成 21 年度にかけて、計 4 回の検討懇談会を実施しました。検討懇談会では、国立公園錦江湾地域の戦略的運営プログラムの検討のため、幅広い観光振興、地域振興の観点からの議論をいただきました。

本プログラムとして取りまとめられた内容以外でも、幅広く錦江湾周辺地域の魅力づくり等に向けた意見をいただきました。いずれも、今後の錦江湾周辺地域の地域振興、観光振興を図る上で、参考とすべき貴重な内容を含むご意見と考えられますので、ここに付記します。

#### ①錦江湾地域の価値の再評価と新たな資源

- ・屋久島の縄文杉よりも大きい日本一の巨木である蒲生のオオクスは、知名度は低いですが、観光資源として注目すべき。
- ・国内に分布する植物種約 5000 種のうち、約 3000 種が鹿児島県で観察でき、観光資源として活用できるものもあるのではないかと。
- ・大隅地域は遠いのでどうしても観光が弱くなるが、そのポイントとなるのは照葉樹林。照葉樹林といえば稲尾岳が有名で、昔は広い範囲を照葉樹林が覆っていた。現在でも、ところどころに小さな照葉樹林が残っている。面積は小さいが非常に良い照葉樹林がある。錦江湾側の風当たりの弱い沢筋などでは非常に大きな木がたくさんあるところもある。
- ・海を活用していきたいと思うが、漁業権にしばられてほとんど活用できない。このような問題をどのように解決できるのか。このような問題にも踏み込んで錦江湾の活用を考えていただきたい。
- ・市の中心部に九州最大の湖である池田湖があり、それと九州二番目の鰻池という水瓶を持ち、農業面・生活面において水の心配がない恵まれた地域である。これらの水を活用して開聞山麓では唐船峡そうめん流しというのがある。京田湧水は平成の名水百選にも選ばれている。
- ・都会と比べて、地方の大きな魅力の一つは、時間の感覚が違うということである。それを意図的に取り込むような感覚が無いといけない。過去の観光スタイルを追い求めることが、果たして得策かどうかを考える必要がある。

#### ②資源の活用方策

- ・ほのかに奄美や沖縄の風が吹いているような気にさせる仕掛けをつくる。埋もれてしまい認識されていない歴史・文化的な資源がたくさんあり、それらを掘り起こしていくことが重要。
- ・人と人を繋げるコーディネーターが必要。大隅半島の自然を活用し、エコツーリズム、グリーンツーリズムを仕掛ける手助けをしてくれる意識の高い街の人達との連携（ヨソ者の視点を借りる）が必要。
- ・「自然」という地域資源を街の人達に伝えていくためには、紙メディアだけではなくブログ等の形にして情報発信していかないといけない。地元の中で情報を出してくれて、ブログやメルマガをしてくれる人がたくさんいると良い。
- ・トヨタ自動車の「G a z o o m u r a (ガズームラ)」というプロジェクトのように、地元の人がブログで情報を出して、この地域に入ればカーナビを通じて、それらの情報が得られるといった仕掛けが考えられる。

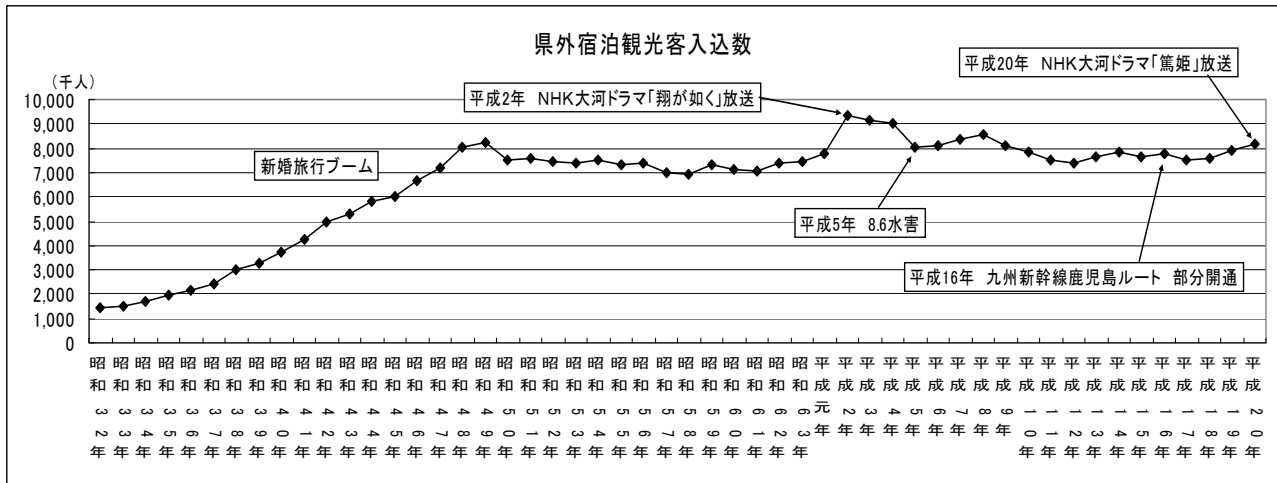
- ・大隅地域にランドマークをつくる必要がある。指宿では健康と観光を合わせた新しいビジネスモデル、ランドマークが建ちつつあるが、大隅半島側にも、ジオパークを主体とするようなビジネスモデル、ランドマークが欲しい。
- ・ジオパークについては、現在は霧島市と宮崎県側が中心に活動しているが、鹿児島県にも音頭をとってもらって、霧島から錦江湾にかけてジオパークにする動きを是非始めて欲しい。
- ・健康という面から、昔は山川にも薬園があり、佐多にも薬園があった。これはこの地域の自然環境に結びついているものであり、健康という面からもビジネスモデルができないか。
- ・県都である鹿児島市の役割が大きく、鹿児島市が商品力を持つことが重要である。鹿児島駅の活用は重要である。鹿児島駅は自然との結節点である。その意味で駅から海に出られ、また市内にも出られるというのが重要。
- ・坂本龍馬は二回鹿児島に来ている。二回目は霧島であるが、一回目は山川に来ており、そのあたりの売り込み方は大切である。
- ・本地域は、桜島の存在感が大きく、男性的なイメージがある。通常のグリーンツーリズムではなく、軟弱な若者をここで鍛え直すような、そんなグリーンツーリズムがあっても良い。
- ・長崎鼻や開聞岳は以前と比べて知名度が低下している。錦江湾の観光面でのブランド力を回復するためにも、国立公園の名称を「霧島錦江湾屋久国立公園」とするなど、「錦江湾」を含んだ名称とすることが考えられる。
- ・都市であれ、集落であれ、自然景観と共存していかなければ魅力ある地域はつukれない。都市景観の問題まで踏み込んでいかなければいけない。
- ・これからはゼロからやっていくのではなく、これまで地域住民やNPOがやってきている蓄積があるので、それ活かして積み上げていくようなことを考えないといけない。

### ③拠点をつなぐ取組

- ・鹿児島中央駅からの二次交通、三次交通をどうするのかを考えていく必要がある。
- ・九州新幹線の全線開通とこれからの南九州の観光を考えたとき、長い目でみると日豊線の改良が必要である。
- ・山川ー根占間は物流路線になってしまったが、昔は観光路線であった。就航しているのがフェリーであり船速が遅い。いま南大隅町が求めているのは、鹿児島市を結ぶ高速船ではないであろうか。陸上の道路の整備と三地区を結ぶ高速船が成り立つかが課題である。

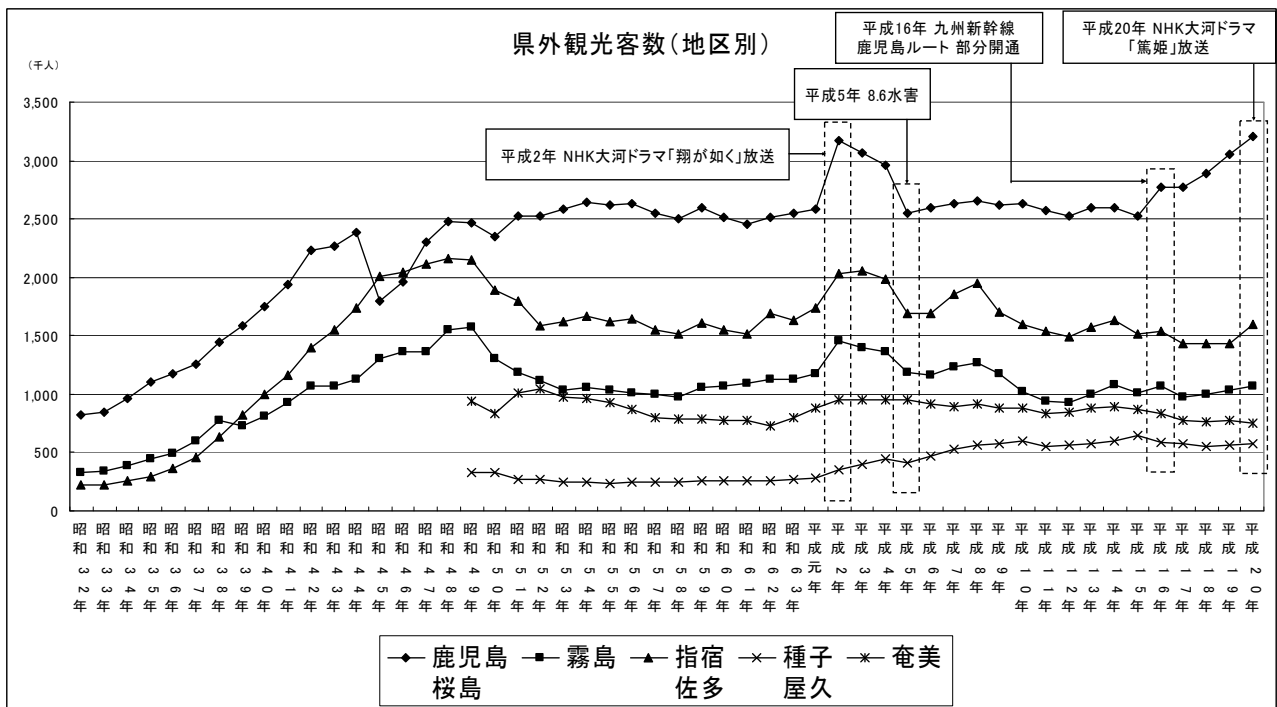
## 2. 錦江湾地域の利用の現状データ集

### ○県外宿泊観光客の推移



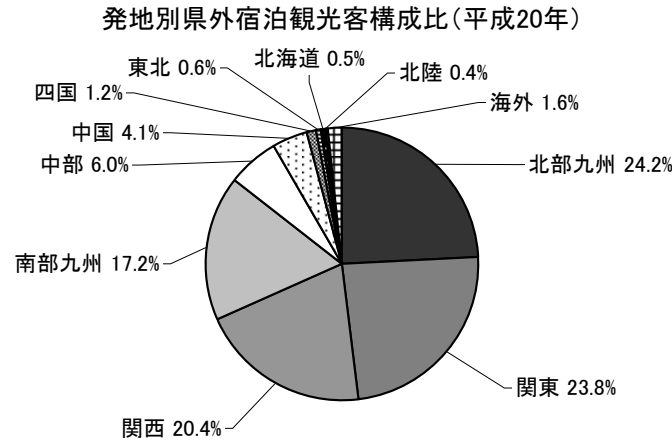
資料：鹿児島県観光事情（平成17年3月発行）、平成20年 鹿児島県観光統計（平成21年7月発行）

### ○県外宿泊観光客の地域別推移



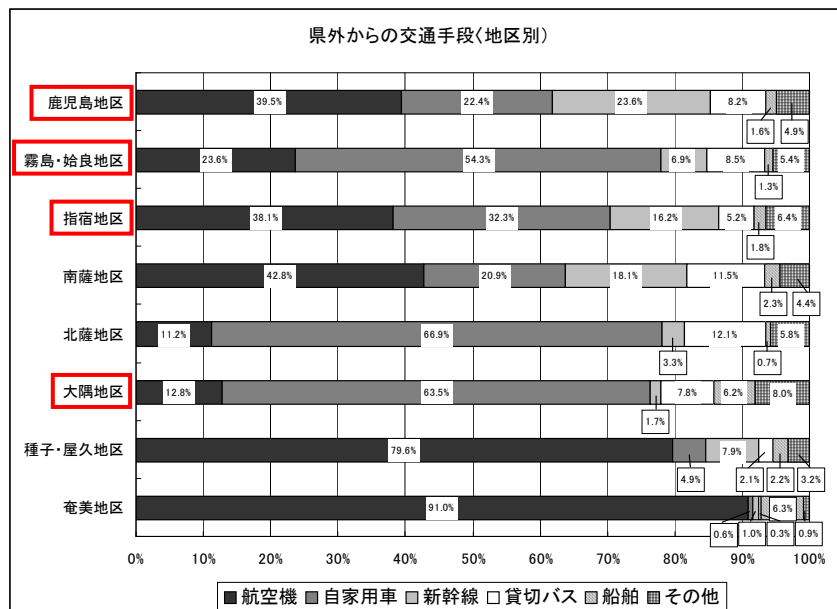
資料：鹿児島県観光事情（平成17年3月発行）、平成20年 鹿児島県観光統計（平成21年7月発行）

## ○県外宿泊観光客の発地状況



資料：平成20年 鹿児島県観光統計（平成21年7月発行）

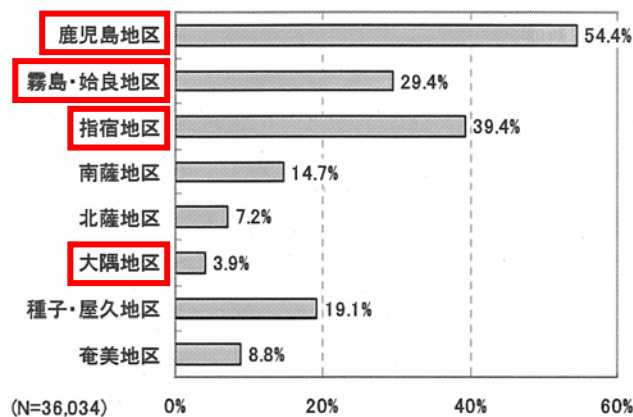
## ○県外観光客の鹿児島までの交通手段（地区別）



資料：九州新幹線開業関連観光動向調査報告書（平成17年3月：鹿児島県商工観光労働部観光課）

## ○県外観光客の訪問地

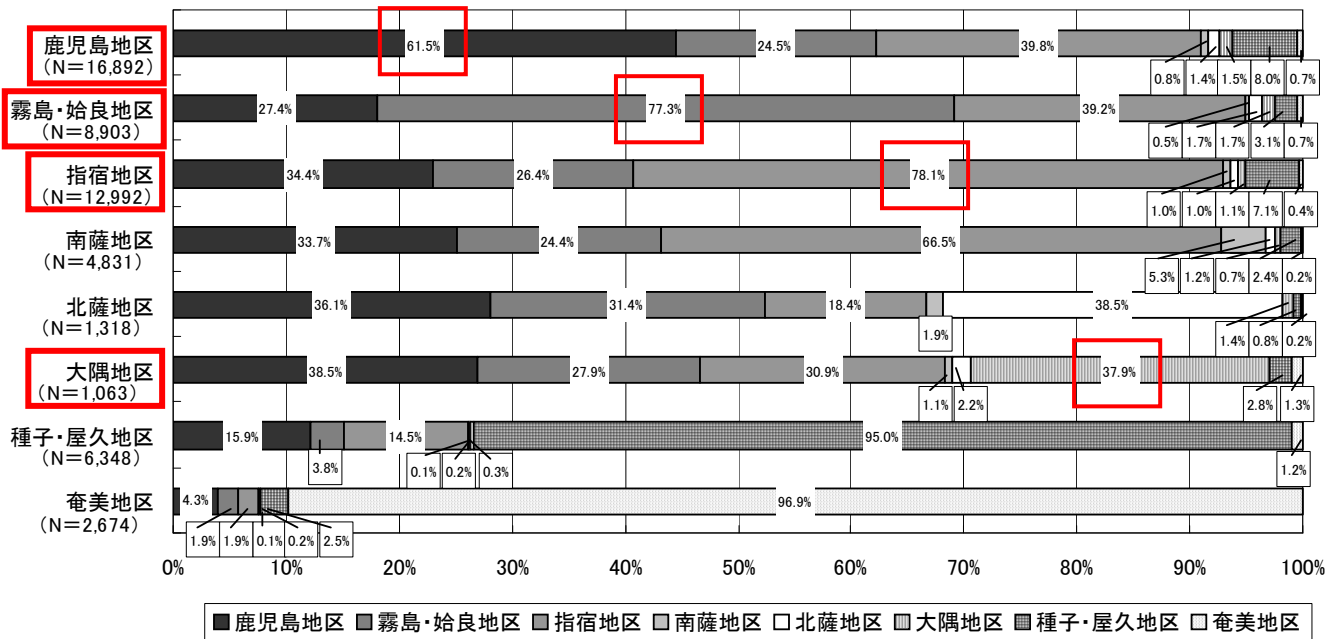
図Ⅲ-1-18 訪問地（複数回答）



資料：九州新幹線開業関連観光動向調査報告書（平成17年3月：鹿児島県商工観光労働部観光課）

## ○県外観光客の宿泊地

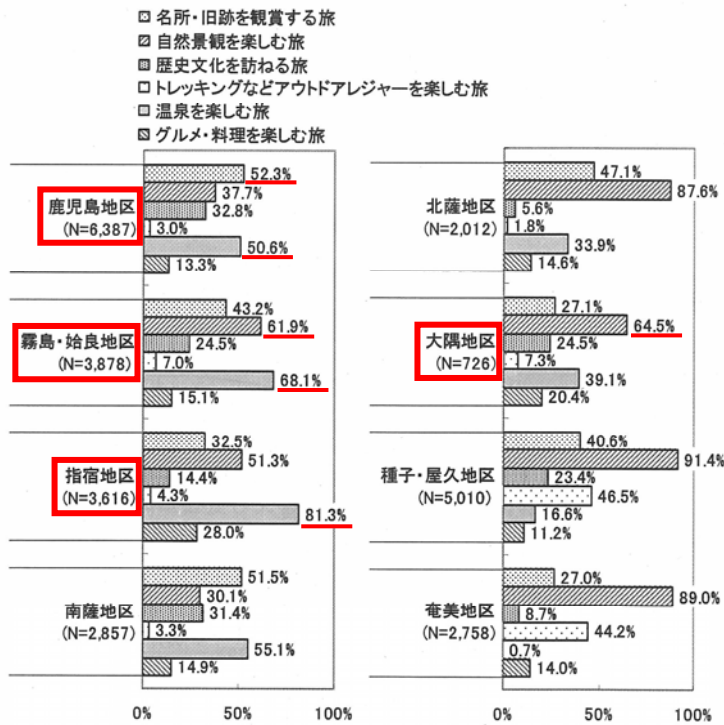
### 訪問地別の宿泊地



資料：九州新幹線開業関連観光動向調査報告書（平成17年3月：鹿児島県商工観光労働部観光課）

## ○県外観光客の観光旅行目的

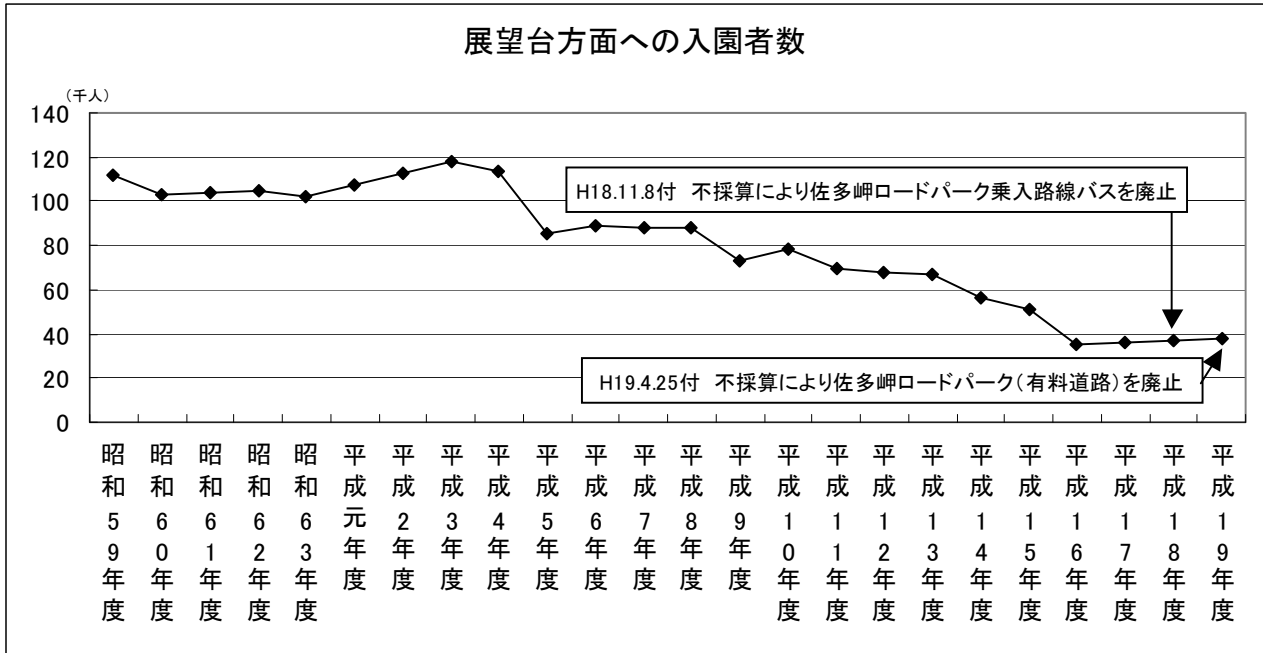
図Ⅲ-1-33 観光旅行の主目的（県内地区別）



資料：九州新幹線開業関連観光動向調査報告書（平成17年3月：鹿児島県商工観光労働部観光課）

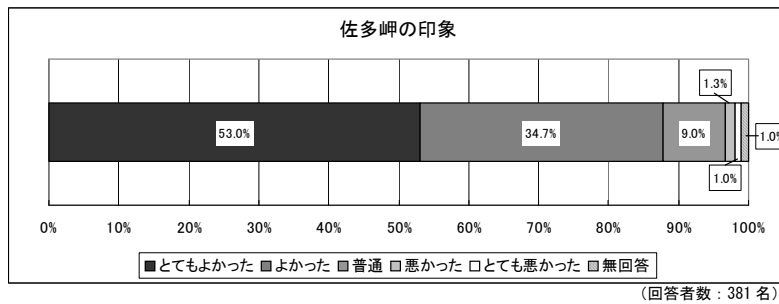


○佐多岬の観光客の推移



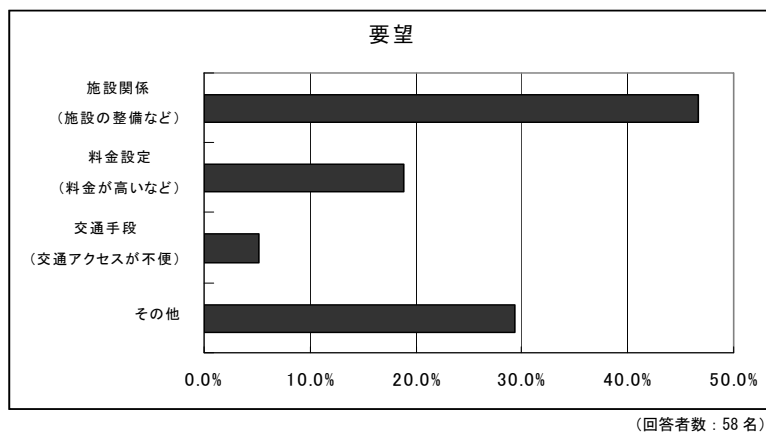
○佐多岬の印象

資料:いわさきグループ資料



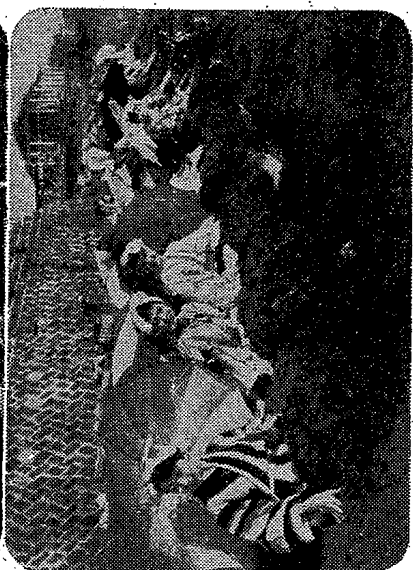
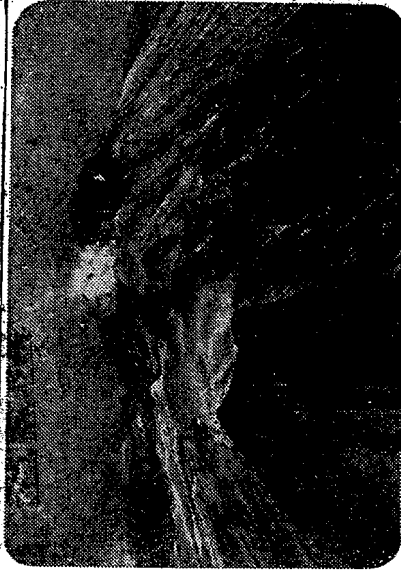
資料: 南大隅町(佐多岬)の活性化(平成20年度:鹿児島県立南大隅高等学校)

○佐多岬において気づいた点



資料: 南大隅町(佐多岬)の活性化(平成20年度:鹿児島県立南大隅高等学校)





①改修頂上 ②佐多岬灯台付近 ③指宿の砂風呂温泉

# 待った九年『錦江湾国定公園』

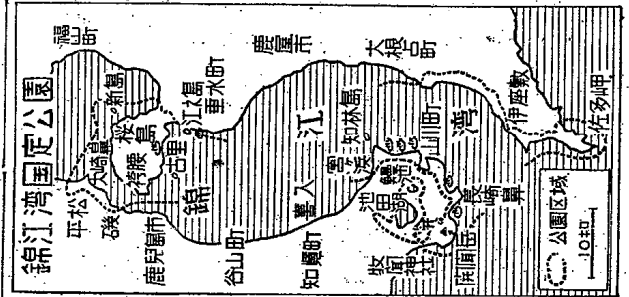
## 火山博物館など建設

### 着々観光施設を充実

錦江湾国定公園は、九年の待たせられた。この間、公園の整備は、着々進められてきた。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。

【指宿地区】指宿地区は、公園の中心地として、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。特に、指宿岬の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。

【佐多地区】佐多地区は、公園の南西部に位置し、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。特に、佐多岬の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、佐多地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。



この公園は、指宿岬の火山地帯を中心に、公園の中心地として、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。特に、指宿岬の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。

この公園は、指宿岬の火山地帯を中心に、公園の中心地として、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。特に、指宿岬の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。

この公園は、指宿岬の火山地帯を中心に、公園の中心地として、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。特に、指宿岬の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。特に、火山博物館の建設が、最大の進捗を遂げた。この博物館は、公園の火山地帯を、よりよく理解させるための重要な施設となる。また、公園内の観光施設も、着々充実してきている。特に、指宿地区の観光施設は、近年特に目覚ましい進歩を遂げている。このように、公園の整備は、着々進められてきている。

## 霧島・屋久国立公園

屋久島と錦江湾を新らしく編入

改称さまる

小林厚相は二月十一日の自然公園審議会(国土庁)の答申に基づき、霧島国立公園の拡張にともなう公園計画と地籍整理を十六日付けの官報で指示する。

拡張の内訳は、●屋久島を新たに国立公園として霧島国立公園に編入する●錦江湾を従来の国立公園から解

除、改めて国立公園に昇格させ霧島国立公園に編入する。

この二つを併せて屋久島と錦江湾は同日から国立公園として新発足する。

なおさきの自然公園審議会は従来の「霧島国立公園」を改めて「霧島・屋久国立公園」と改称することも決めた。

毎日新聞 (昭和39年3月16日)

# きょう発足

## 霧島屋久国立公園

厚生省は自然公園審議会の答申に基づき、錦江湾指定公園と屋久島を霧島国立公園に編入して霧島屋久国立公園と改称することとなり、十六日付け官報に霧島国立公園の名を添え、公園区域の拡張ならびに公園計画を告示する。同時に、錦江湾地区を国立公園の指定から解除した。

霧島国立公園は昭和九年三月十六日指定後、三十年目途に達しており、この指定で公園区域は従来の二万二千五百六十畝から二倍強の五万五千三百三十一畝に拡張される。

南日本新聞 (昭和39年3月16日)

# 編入記念の石碑など

## 祝賀行事も計画

「霧島・屋久国立公園」が出生

長い間地元の念願だった錦江湾国立公園と屋久島の国立公園編入は、十六日告示され「霧島・屋久国立公園」として同日から正式にスタート。『観光鹿児島』にシンと意味を加えた。

これを機会に県や地元市町村では、五月から六月にかけて鹿児島山の記念行事を計画している。まず、県では厚生省や国立公園審議会、地元市町村の関係者などを招いて記念式典、祝賀会を随き、多年観光事業に尽力した人たちに表彰し、国立公園の前途を祝賀する。また、霧島、指宿、開聞、佐多、屋久島の五地区に国立公園編入記念の石碑を建て、映画会や座談会による「国立公園の夕べ」を催す。

一方、県観光連盟でも期間中「観光週間」を設け、国民大会の開催、観光客を暖かく迎える運動、花いっぱい運動、観光施設の整備などを中心に県心を国立公園祝賀一色に染めようとする。

これらはまた日時、場所なども未定だが、県や観光連盟では緊急に具体案をつくりあげようとしている。

レントゲン車、簡易療の巡回診療、除塵機、年金福祉事業団では簡易保険加入

朝日新聞 (昭和39年3月17日)